

国語 相手意識を高め、子どもの語彙を



POINT | 態度

読みを充実させるため、他者意識を高める工夫

「学びに向かう力」では、子ども自身が単元のゴールを達成することが大切だと考えられる。そのため、他者のよさを見つけたり、自分を客観的に分析したりすることで、子ども自身が主体的に読みに向かうことができるような気持ちが見れるだろう。そこで、子どもの表現のよし悪しを子ども自身が判断できるようになる手立てを「ぞろぞろ」での実践例で紹介する。

「ぞろぞろ」では、落語を声に出して楽しむことを目標として学んでいくが、聞き手に伝わるように工夫して音読したり演じたりする必要性に気が付いていく必要がある。

まずは、落語を聞き手に伝えるために、十分な声量で音読することから始めた。

1 自分の音読を客観的に分析する

(1) Classroomscreen で自分の声量を測る



【Classroomscreen で音量を計測する画面】

この機能を活用することで、自分の声の大きさが数値となって可視化される。これにより、意識しやすくなり、大きな声で音読することが自然と多くなっていくだろう。

(2) ロイロノートで自分の声を録音する

録音をすることで客観的に自分の音読を聞くことができる。慣れてきたら声の大きさだけではなく、声色や抑揚にも注目できるようにする。また、録音を整理して保存することで自分の成長を振り返ることもできる。

2 音読での表現の工夫を他者からも学び、自己表現を充実させる

次に、落語のように1人で何役も使い分けて読む活動をした。その際に、友達の良いところを見つける活動や、落語家に来てもらい本物の落語を体感することで、自分との読み方の違いに気付く活動も行った。実際に落語家の話し方を聞くことで、子どもたち自身がより相手に伝わる話し方を学んでいた。

面白かったことは、「落ち」です。すごいと思ったことは、そばを吸うところです。学んだことは、「間」を開けること、口調です。自分の落語とちがかったところは、声の大きさ、声を使い分けること、手振り身振りをするところです。本当の落語家さんに会ったのは、初めてだったのでものすごく楽しかったです。この1時間で、落語のことをたくさんしれて楽しかったです。

【落語を聞いた子どもの感想】

この一連の活動を通して、子どもたちの中に目的意識が芽生え、自ら「聞き手により伝わるためにはどうしたらよいか」を考えた学びをしていた。そして、その後の国語科の授業や学習発表会の劇でも、相手意識をもって表現しようとする子どもたちの姿が見られ、指導の効果を実感した。

増やす工夫

幕別町立札内北小学校 教諭 小野 竜大



小学校4学年

POINT 2
思・判・表

読み手に伝わりやすい文章を書くために語彙を増やす工夫

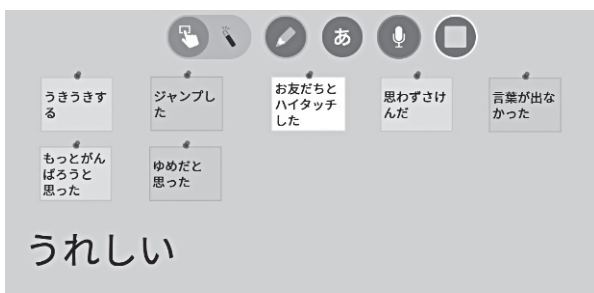
学年が上がれば上がるほど、文章を書く際に求められることが多くなる。そこで、特に読み手に伝わりやすい文章を書くために、国語の作文などを書く時間で語彙を増やす工夫をすること、また、その培った力を使い、他教科と関連させることで、高学年で求められている書く力を養っていく。

1 全員で語彙を増やす活動をする

子どもたちがよく使う言葉に「楽しかった」や「うれしかった」がある。しかし、これでは表現の幅が狭いように感じるだろう。そこで、子どもたちの実態に応じて段階的に禁止するワードを決めていく。例えば、「うれしい」という言葉を禁止したとする。すると、『『うきうきする』はいいですか』などの意見が出る。そして、子どもたちから出てきた表現をどこかにまとめていつでも誰でも見られるようにする。そのまとめ方について2つ例示する。

(1) ロイロノート（共有ノート）

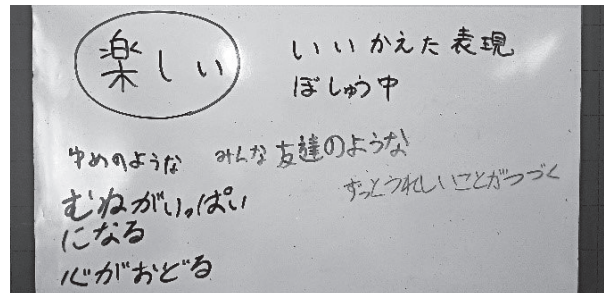
思い付いたらどんどん付箋で言葉を追加してまとめることで、全員の共有財産にすることができるだろう。



【共有ノートの実例】

(2) ホワイトボード

ホワイトボードに言葉を残すと、学級掲示の一部になり、常に目に入りやすくなる。子どもたちはその後の作文等を書くときに、参考にしながら言葉を選び、書き進めていた。



【ホワイトボードの実例】

禁止するワードを決めると嫌がる子どももいるだろうが、意外にも火がつく子どもが多く、語彙力アップのきっかけになることが考えられる。また、代わりになる言葉を考えた子どもも、多くの友達に使ってもらえることで喜んでいる様子も見られた。

2 他の教科とも関連させる

図工の感想が「〇〇を作って楽しかった」だとしたら、「どこが楽しかったの？」というように問いかけることで、具体的に書けるように促していくことが考えられる。また、様々な教科で新聞等にまとめる活動があるが、国語で学んだことを意識できるように声掛けをしていく。「書くこと」を国語で完結するのではなく、国語で学んだことを他教科の中でどう生かすかや、他教科で必要な書く力を国語でどう養っていくかという視点も大事になるだろう。

小学校6学年

中学校2学年